

# 元禄期歌人の添削資料

## 神作 研一

### 解題

いくつかの堂上どうじょうの事例を除けば、江戸前期に遡る地下じげの添削資料、それも原態を留めた一次資料の伝存は、極めて稀だと言ってよい。その意味で、美濃国加治田かしたの豪商平井家にまとまって伝襲したそれ（岐阜県加茂郡富加町郷土資料館現蔵・全六二点）は、先ずその伝存の事実自体が刮目に価しよう。

その添削資料群（すべて一次資料）は、平井家第八代冬音らの詠草を上方へと送り、かの地の歌学者——香川宣阿・香川景新・金勝慶安・水田長隣・有賀長伯ら元禄期に上方で活躍した地下二条派歌人たちが——によって添削、返送されてきたもので、元禄上方地下歌人の和歌観や詠歌作法を知るにすこぶる有用なものである。中でも特に注目すべきは、冬音らが、ほぼ同時期に同題の詠草を複数の点者に別々に送って添削を受けている資料が出現したことであり（正徳五年〈宣阿・長隣・慶安〉、享保元年〜二年〈宣阿・長隣〉の二例。前者をA、後者をBとする）、これを承けて筆者は、このほど、右二例の添削の跡を比較検

討して、彼らの和歌観を添削の現場に即して炙り出すことを試みた<sup>①</sup>。

そこでは、紙幅の都合により当該資料全文の掲出がままならなかったので、今ここに、右二例の影印ならびに翻印を果たしたい。とりわけ影印は、添削をめぐる雰囲気がかがう助として極めて重要だと考える。一次資料の持つまたとない迫力——点者自身によって書き込まれた生々しい添削の跡——を感得されたい。もとより元禄期諸歌人の筆跡資料としても貴重であること、言を俟つまい。

では以下に、A、Bそれぞれの書誌的概要を記しておく。<sup>②</sup>

#### A 平井冬音ほか詠三十首和歌

出詠者は四人。冬音（二二歳）・副雄（山本左近）・常観（平井久左衛門意宣）・仙庵（伊深の庄屋。長沼玄仲）。

（ア）⑧香川宣阿点（正徳五年） \*宣阿六九歳。 \*12 / 093。

継紙一通。縦一五、二種×横二五二、二種。楮紙。奥書「点十六首／此一巻近来之内／別而御秀逸／珍重／／宣阿（花押）」。端裏（後書）「宣阿加筆正徳五未年」。

(オ) ②水田長隣点(同年) \*長隣五〇代後半。\*12/091。

継紙一通。縦一五、三糎×横二五〇、七糎。楮紙。奥書

「僻案愚墨二十一首之内/長二首/長隣(「盈細」茶印)」。

巻首二破レアル為ニ端裏不明。

(ウ) ④金勝慶安点(同年) \*慶安七〇歳。\*12/103。

継紙一通。縦一五、三糎×横二六三、四糎。楮紙。添削

は朱書。奥書(朱書)「十九点内長一 慶安(「郷高」朱

印)」。端裏(後書)「□勝慶安加筆正徳五末年」。

**B** 平井冬音詠二十首和調

(ア) ⑪香川宣阿点(享保元年七月) \*宣阿七〇歳。\*12/0

99/1。継紙一通。縦一四、八糎×横一八六、四糎。

楮紙。奥書ナシ。端裏(後書)「享保元年申ノ七月日梅

月堂加筆」。

(オ) ④水田長隣点(享保二年七月) \*長隣五〇代後半。\*12

/099/2。継紙一通。縦一六、四糎×横一八一、六

糎。楮紙。奥書「僻墨十四首之内/長二首(「盈細」茶

印)」。端裏(後書)「丁酉夷則水田不遠斎長隣加筆」。

なお、翻印にあたっては、添削の様子をそのままに再現することをせず、添削の結果成立した新しい本文を原歌の次行に置くこととした。<sup>(3)</sup>これは、各点者の添削のさまが一覧比較できるようにとの配慮に基づく所為である。詳細は次掲「凡例」につかれたく、また適宜影印を参照願いたい。

注

(1) 拙稿「元禄の添削」(『近世文藝』八一号、平一七・一)。

(2) (ア)⑧とか(オ)②などの符号は、注(1)拙稿に所掲の《加點詠草一覽表》の符号に共通する。

(3) 上野洋三氏『万治御点 校本と索引』(和泉書院、平一二)の翻刻方針を参考とした。

〔付記〕所蔵資料の紹介を許された富加町郷土資料館に厚く御礼申し上げる。

(かんさく・けんいち 本学文学部助教)

凡例

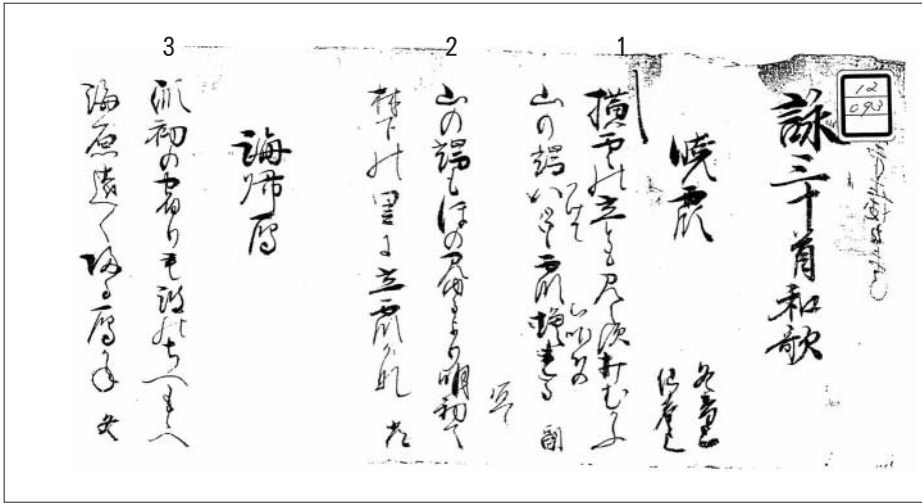
- 一、影印にあたっては、適宜縮少したほか、比較、読解の便を考慮して、各歌の位置を揃えるために、一部に原本の余白部分を切り継いだところがある。
- 一、和歌の頭に通し番号を付した。これは、翻印編の原歌に与えた番号に対応する。
- 一、原歌の本文は、A、Bともに宣阿点の詠草のそれに拠った。唯一原歌に異同のあるB15のみ、その異同箇所を併記した。
- 一、点者ごとに、その添削後の新しい和歌本文を併記した（原歌の次行以下に置く）。
- 一、評語はへくにくるんで掲出し、適宜句読点を施した。なお、長隣の評語に頻出する「仍——」の「仍」以下のところには、添削後の新しい和歌本文が入ると思しい。
- 一、合点を「○」、長点を「◎」で示した。
- 一、「〔 〕」内は、筆者による注記である。
- 一、漢字は適宜通行の字体に改めた。
- 一、和歌本文、評語とも、適宜濁点を付した。
- 一、虫損等による判読不能箇所は□で示した。
- 一、誤字や脱字、仮名遣いの誤りについても原本のままとし、適宜(ママ)と注記した。

〈影印編〉

A 平井冬音ほか詠三十首和歌

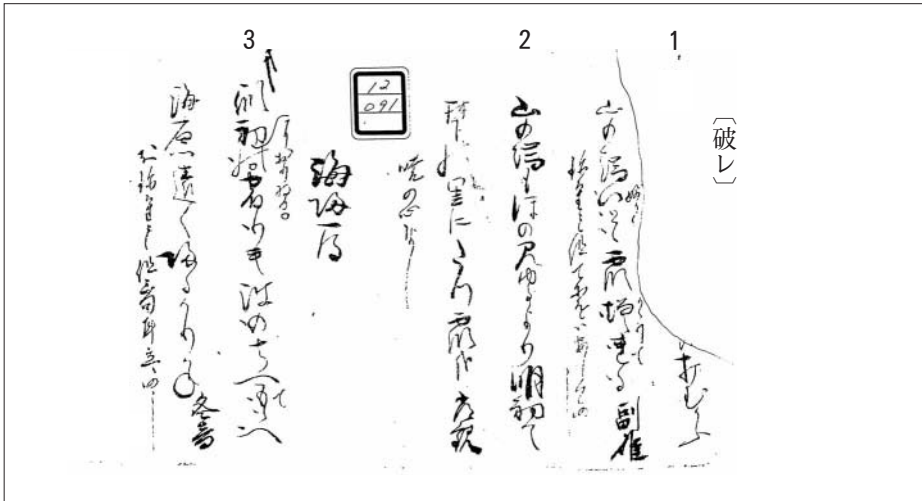
香川宣阿点

(端裏) 直河初子佳也也



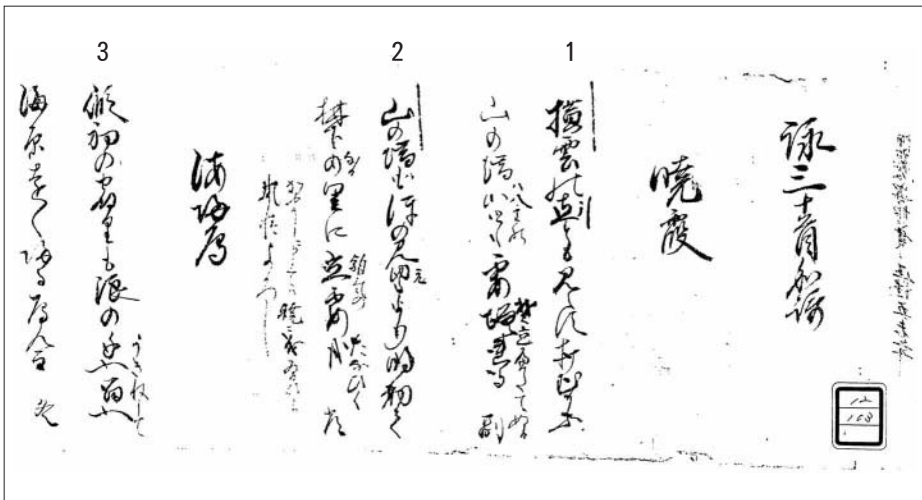
水田長隣点

(端裏) [破レ]



金勝慶安点

(端裏) 即慶慶初葉、正保五年筆



4 月送きに出すもあはる海原の  
の松原を  
 中たは海にゆき居る大

5 白妙に敷垣をむむ以今期  
 言やみよりけ昔の園河別

6 月送し程のむれあきよ  
 こけのまよりけ冬移し仙

樹花印也

7 反ととも暮る言の種は  
 言れなき春のむれ也  
巻

8 消滅するも尺くも本陰  
 行り敷く一も言ふれ也 欠

4 月送きに出すもあはる海原の  
の松原を  
 中たは海にゆき居る大  
協ま  
下白濁のま

5 白妙に敷垣をむむ以今期  
 言やみよりけ昔の園河別

6 月送し程のむれあきよ  
 昔のまよりけ冬移し仙  
氣をかりては移す

樹花印也

7 反ととも暮る言の種は  
 言れなき春のむれ也  
巻

8 消滅するも尺くも本陰  
 行り敷く一も言ふれ也 冬島  
下白濁のま

4 月送きに出すもあはる海原の  
の松原を  
 中たは海にゆき居る大

5 白妙に敷垣をむむ以今期  
 言やみよりけ昔の園河別

6 月送し程のむれあきよ  
 昔れ縁のまよりけ 仙

樹花印也

7 反ととも暮る言の種は  
 言れなき春の印也  
巻

8 消滅するも尺くも本陰  
 行り敷く一も言ふれ也

雨夜蝉

9 村五井晴の雨の音とあま

やましくむく蝉の泣声は

10 夕立の雨の音に響きあ

聲も清き夜半の露

雨庭露

11 まくもつまなほの秋草に

心もまれぬのゆき言

12 雨の音とあまの世の音と

こぼれをみる涙もあまの

あつ月

13 沈月の光と秋の夕風川

はの庭も秋の夕風川

雨夜蝉

9 村五井晴の雨の音とあま

やましくむく蝉の泣声は

10 夕立の雨の音に響きあ

聲も清き夜半の露

雨庭露

11 まくもつまなほの秋草に

心もまれぬのゆき言

12 雨の音とあまの世の音と

こぼれをみる涙もあまの

あつ月

13 沈月の光と秋の夕風川

はの庭も秋の夕風川

雨夜蝉

9 村五井晴の雨の音とあま

やましくむく蝉の泣声は

10 夕立の雨の音に響きあ

聲も清き夜半の露

雨庭露

11 まくもつまなほの秋草に

心もまれぬのゆき言

12 雨の音とあまの世の音と

こぼれをみる涙もあまの

あつ月

13 沈月の光と秋の夕風川

はの庭も秋の夕風川



14 眺るあを遠く下は月を  
 光り下は字の字を  
 風を  
 河沿紅葉

15 刻はほし流し帆合のそ  
 袖まく秋のいろはわりの仙  
 玉汗のたり人の神を  
 丹にーその流る丹葉を  
 丹葉

17 吹流し言ひ内も冬は花の  
 わり淋く木葉落なり  
 今朝色を移る丹葉流る此  
 光り下は字の字を  
 風を

18 光り下は字の字を  
 風を

14 眺るあを遠く照月を  
 光り下は字の字を  
 風を  
 河沿紅葉

15 刻はほし流し帆合のそ  
 袖まく秋のいろはわりの仙  
 玉汗のたり人の神を  
 丹にーその流る丹葉を  
 丹葉

17 吹流し言ひ内も冬は花の  
 わり淋く木葉落なり  
 今朝色を移る丹葉流る此  
 光り下は字の字を  
 風を

18 光り下は字の字を  
 風を

14 眺るあを遠く照月を  
 光り下は字の字を  
 風を  
 河沿紅葉

15 刻はほし流し帆合のそ  
 袖まく秋のいろはわりの仙  
 玉汗のたり人の神を  
 丹にーその流る丹葉を  
 丹葉

17 吹流し言ひ内も冬は花の  
 わり淋く木葉落なり  
 今朝色を移る丹葉流る此  
 光り下は字の字を  
 風を

18 光り下は字の字を  
 風を

寒き也

19 いつとあけ格く柳の池を三  
葉の外もふく水困なる 別

20 いろはれ格もあまたに三路は  
玉柳格言ふ葉の村と  
え

近心

21 いもれ格行路と並み草  
余初葉は神の涙せらん

22 いもれ格葉の中垣へくも

あはれは 柳の下草や

寒き也

19 いつとあけ格く柳の池を三  
葉の外もふく水困なる 別

20 いろはれ格もあまたに三路は  
玉柳格言ふ葉の村と  
え

近心

21 いもれ格行路と並み草  
余初葉は神の涙せらん

22 いもれ格葉の中垣へくも

あはれは 柳の下草や  
エト連続四葉中一と云

寒き也

19 いつとあけ格く柳の池を三  
葉の外もふく水困なる 別

20 いろはれ格もあまたに三路は  
玉柳格言ふ葉の村と  
え

近心

21 いもれ格行路と並み草  
余初葉は神の涙せらん

22 いもれ格葉の中垣へくも

あはれは 柳の下草や  
下葉四の三葉の中



馴恋

23 たいせく湖のなれ柳に  
まれくろまよふ娘の袖 大

24 さいあひ昔ま日思ひに  
別一言て何びくせん 但

春灯恋

25 高上る湖の園より火は  
まゆもれ思ひをす 但

26 清流くひらりぬ春灯を  
まてたのちのくまお 大

馴恋

23 たいせく湖のなれ柳に  
まれくろまよふ娘の袖 大

24 さいあひ昔ま日思ひに  
別一言て何びくせん 但

春灯恋

25 高上る湖の園より火は  
まゆもれ思ひをす 但

26 清流くひらりぬ春灯を  
まてたのちのくまお 大

馴恋

23 たいせく湖のなれ柳に  
まれくろまよふ娘の袖 大

24 さいあひ昔ま日思ひに  
別一言て何びくせん 但

春灯恋

25 高上る湖の園より火は  
まゆもれ思ひをす 但

26 清流くひらりぬ春灯を  
まてたのちのくまお 大

27 何處までもて金ふ方は  
むくに困る古里は危 夫

28 谷村橋の打もまは住置て  
里むくし面氣をまき 夫

神

29 神垣と隔ありし柳葉は  
善い一筋の家てまはし 夫

30 小早振神代のみまに柳葉も  
葉ひさしき天の春ふ心 夫

けつてをらふ南  
河のあまら

五言

27 何處までもて金ふ方は  
多の住し候 夫

28 谷村橋の打もまは住置て  
里むくし面氣をまき 夫

神

29 神垣と隔ありし柳葉は  
善い一筋の家てまはし 夫

30 小早振神代のみまに柳葉も  
葉ひさしき天の春ふ心 夫

何處までもて金ふ方は  
長二首

五言

27 何處までもて金ふ方は  
何處までもて金ふ方は 夫

28 谷村橋の打もまは住置て  
里むくし面氣をまき 夫

神

29 神垣と隔ありし柳葉は  
善い一筋の家てまはし 夫

30 小早振神代のみまに柳葉も  
葉ひさしき天の春ふ心 夫

何處までもて金ふ方は  
長二首

五言

B 平井冬音詠二十首和調

香川宣阿点

(端裏) 皇徳元年甲申七月一日 藤原朝子

詠二十首和調

12 099 1

1 雲向郭云 兼冬上

2 風浮水のみをのぼるは 江中菖蒲

3 世ふ入るあはれ心もあはれ 門田早苗

4 嵯麻の目合は程短也 陵史照村

せり此の余阿小畑行

水田長隣点

(端裏) 下直虎則尚不近奇其傳の業

詠二十首和調

12 099 2

1 雲向郭云 兼冬音上

2 風浮水のみをのぼるは 江中菖蒲

3 世ふ入るあはれ心もあはれ 門田早苗

4 嵯麻の目合は程短也 陵史照村

せり此の余阿小畑行

9  
よもはと玉ととも池水に  
ふみく葉の蓬葉

8  
消世光<sup>世</sup>うら<sup>ら</sup>の夜<sup>は</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>  
毎火<sup>毎</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>  
池と蓬

7  
夏草<sup>夏</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>  
こ<sup>こ</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>

6  
兼中燈火  
中<sup>中</sup>馴<sup>馴</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>う<sup>う</sup>牛<sup>牛</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>  
任<sup>任</sup>え<sup>え</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>は<sup>は</sup>じ<sup>じ</sup>

5  
旅舟七月雨  
清<sup>清</sup>舟<sup>舟</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>雪<sup>雪</sup>初<sup>初</sup>く  
う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>他<sup>他</sup>も<sup>も</sup>青<sup>青</sup>なる<sup>なる</sup>也

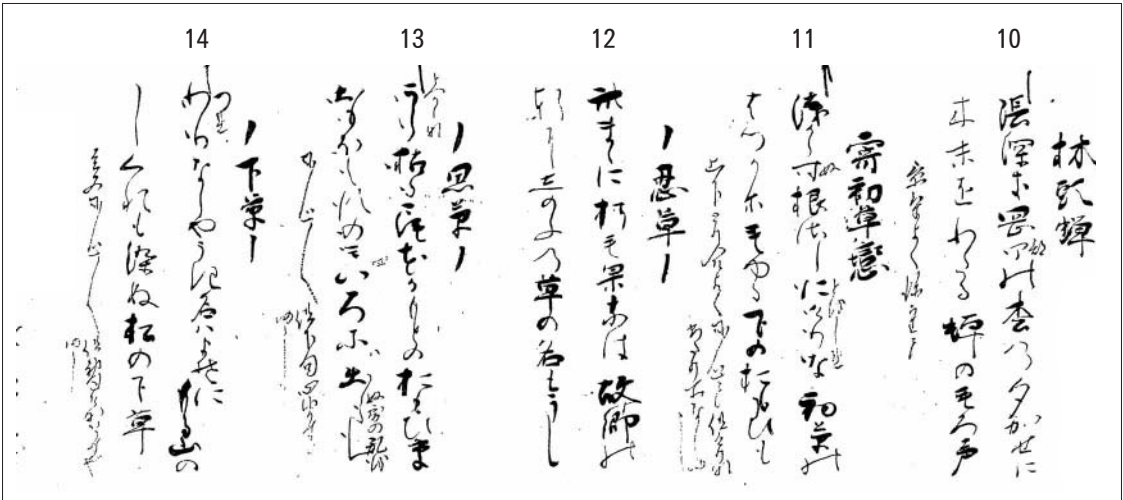
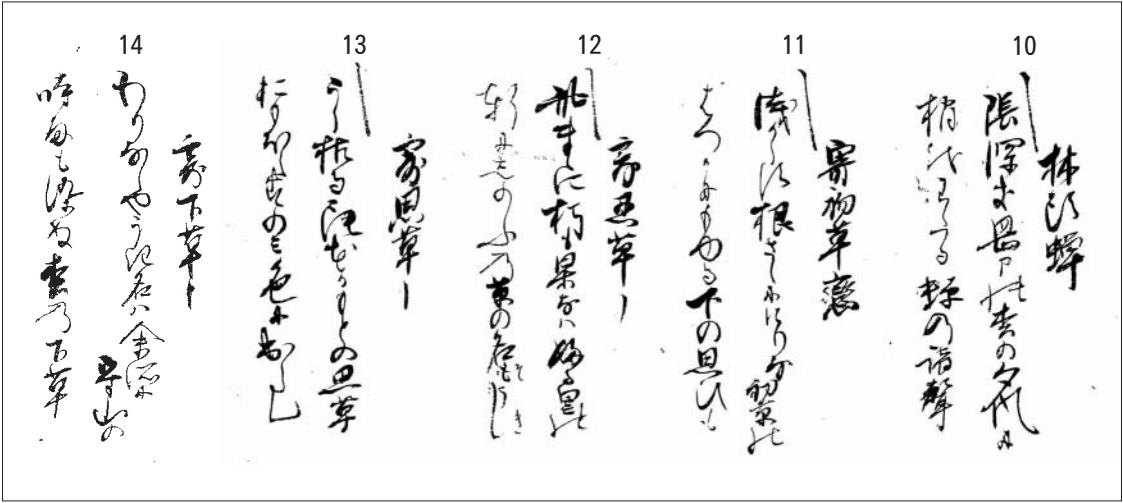
9  
赤<sup>赤</sup>は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>玉<sup>玉</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>池<sup>池</sup>水<sup>水</sup>に  
う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>み<sup>み</sup>く<sup>く</sup>葉<sup>葉</sup>の<sup>の</sup>蓬<sup>蓬</sup>葉<sup>葉</sup>

8  
消<sup>消</sup>世<sup>世</sup>光<sup>光</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>夜<sup>夜</sup>と<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>  
毎<sup>毎</sup>火<sup>火</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>  
池<sup>池</sup>と<sup>と</sup>蓬<sup>蓬</sup>

7  
夏草<sup>夏</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>  
こ<sup>こ</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>

6  
兼中燈火  
中<sup>中</sup>馴<sup>馴</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>う<sup>う</sup>牛<sup>牛</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>  
任<sup>任</sup>え<sup>え</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>は<sup>は</sup>じ<sup>じ</sup>

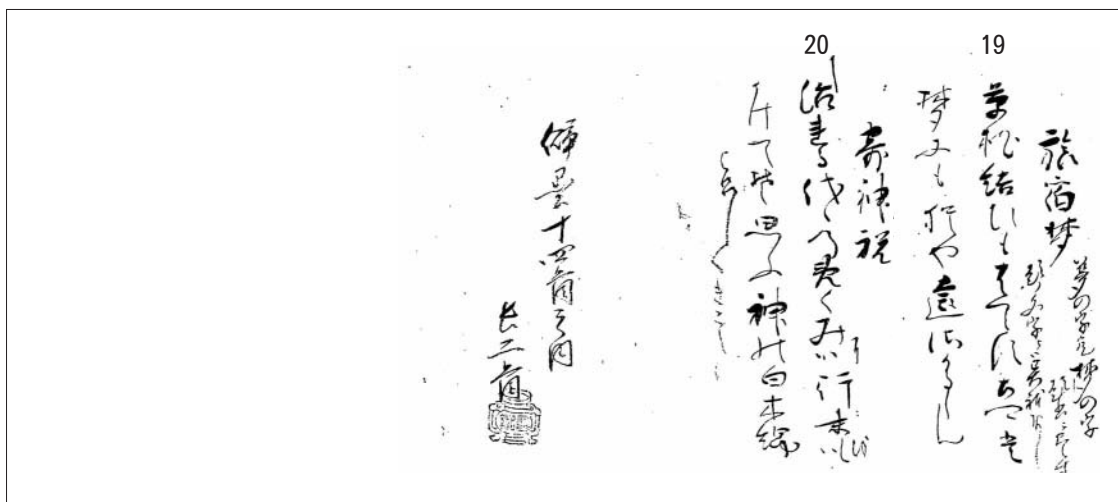
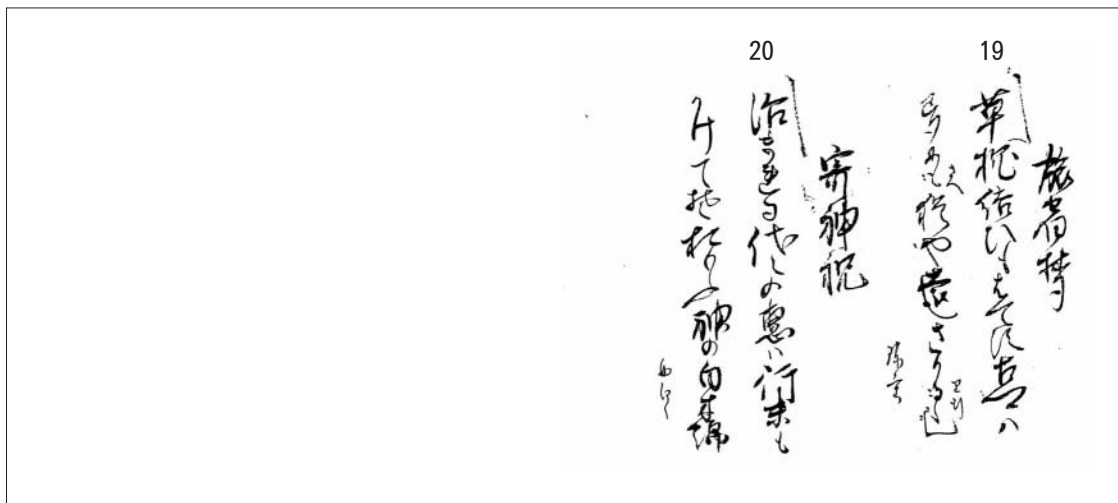
5  
旅舟八月雨  
清<sup>清</sup>舟<sup>舟</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>雪<sup>雪</sup>初<sup>初</sup>く  
う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>他<sup>他</sup>も<sup>も</sup>青<sup>青</sup>なる<sup>なる</sup>也



<p>18</p> <p>立<sup>た</sup>ぬ<sup>も</sup>と<sup>あ</sup>まの<sup>水</sup>は<sup>草</sup>か<sup>れ</sup>  <small>雲浮野水</small>  <small>し<sup>ら</sup>ぬ<sup>も</sup>と<sup>あ</sup>まの<sup>水</sup>は<sup>草</sup>か<sup>れ</sup></small></p>	<p>17</p> <p>物<sup>た</sup>は<sup>し</sup>は<sup>れ</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>ば  <small>夕<sup>ゆ</sup>思<sup>し</sup></small>  <small>夕<sup>ゆ</sup>思<sup>し</sup>は<sup>れ</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>ば</small></p>	<p>16</p> <p>長<sup>ち</sup>と<sup>る</sup>唐<sup>た</sup>人<sup>の</sup>く<sup>さ</sup>ら<sup>ま</sup>す  <small>嘆<sup>なげ</sup>遠<sup>とほ</sup>情<sup>じやう</sup></small>  <small>長<sup>ち</sup>と<sup>る</sup>唐<sup>た</sup>人<sup>の</sup>く<sup>さ</sup>ら<sup>ま</sup>す</small></p>	<p>15</p> <p>佐<sup>さ</sup>ね<sup>も</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>神</sup>の<sup>蔭</sup>に  <small>美<sup>う</sup>高<sup>たか</sup>草<sup>くさ</sup></small>  <small>佐<sup>さ</sup>ね<sup>も</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>神</sup>の<sup>蔭</sup>に</small></p>
---	---	--	--

<p>18</p> <p>立<sup>た</sup>ぬ<sup>も</sup>と<sup>あ</sup>まの<sup>水</sup>は<sup>草</sup>か<sup>れ</sup>  <small>雲浮野水</small>  <small>し<sup>ら</sup>ぬ<sup>も</sup>と<sup>あ</sup>まの<sup>水</sup>は<sup>草</sup>か<sup>れ</sup></small></p>	<p>17</p> <p>物<sup>た</sup>は<sup>し</sup>は<sup>れ</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>ば  <small>夕<sup>ゆ</sup>思<sup>し</sup></small>  <small>物<sup>た</sup>は<sup>し</sup>は<sup>れ</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>ば</small></p>	<p>16</p> <p>長<sup>ち</sup>と<sup>る</sup>唐<sup>た</sup>人<sup>の</sup>く<sup>さ</sup>ら<sup>ま</sup>す  <small>嘆<sup>なげ</sup>遠<sup>とほ</sup>情<sup>じやう</sup></small>  <small>長<sup>ち</sup>と<sup>る</sup>唐<sup>た</sup>人<sup>の</sup>く<sup>さ</sup>ら<sup>ま</sup>す</small></p>	<p>15</p> <p>佐<sup>さ</sup>ね<sup>も</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>神</sup>の<sup>蔭</sup>に  <small>美<sup>う</sup>高<sup>たか</sup>草<sup>くさ</sup></small>  <small>佐<sup>さ</sup>ね<sup>も</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>神</sup>の<sup>蔭</sup>に</small></p>
---	---	--	--





〈翻印編〉

A 平井冬音ほか詠三十首和歌(宣阿点・長隣点・慶安点)(正徳五年)

暁霞

冬音上／仙庵上

1 横雲の立とも見えず打むかふ山の端いと霞増れる 副雄

【宣阿】○横雲の立とも見えず打むかふ山の端かけて霞む明ぼの

〈宣候〉

【長隣】〔破レ〕打むかふ山の端ふかく霞かゝりて

〈珍重に候。但てにをは、あしく候。仍——〉

【慶安】○横雲の引とも見えず山の端は八重の霞ぞ立へだてぬる

2 山の端もほの見ゆるより明初て麓の里に立霞かな 常観

【宣阿】

【長隣】〈暁の心なし〉

【慶安】○山の端はほの見え初て麓なる里に朝けの霞たなびく

〈かやうに□□ては、暁に成習ひ□□。風情よろし〉

海帰鴈

3 仮初の宿りも波のちへも、へ海原遠く帰る鴈がね 冬音

【宣阿】

【長隣】◎仮初におりゐる宿も波ちへて海原遠く帰るかりがね

〈尤珍重に候。但三句、耳立候。仍——〉

【慶安】仮初の宿りも浪のうきねして海原遠く帰る鴈金

4 見送れば果しもあらぬ海原を雲にかくろひ帰る鴈がね 常観

【宣阿】○見送れば果しもあらぬ海原の雲の浪路を帰る鴈がね

〈珍重〉

【長隣】○見送れば果しもあらぬ海原の雲の波路を帰るかりがね

〈珍重〉。但下句、海のよせなし。仍——〉

【慶安】○見るからに果しもあらぬ海原を雲にかくろひ帰る鴈金

苔上落花

5 白妙に散埋みぬる花を今朝雪とみどりの苔の通路 副雄

【宣阿】

【長隣】〈心ふるし〉

【慶安】○

6 風誘ふ梢の花のしらゆきにこけのみどりの色も移らふ 仙庵

【宣阿】○

【長隣】○風誘ふ梢の花のしら雪に苔のみどりも色ぞ移らふ

〈景気ありて、尤珍重に候〉

【慶安】

樹陰卯花

7 夏迄も木陰は雪の残るかど驚かれぬる宿のうの花 仙庵

【宣阿】○夏迄も木陰は雪の残るかど驚かれぬる庭のうの花

〈珍重〉

【長隣】○夏迄も木陰は雪の残るかど驚かれぬる八重のうの花  
 〈珍重に候〉

【慶安】○夏迄も木陰は雪の残るかど驚かれぬる野への卯の花

8 消残る雪と見えしも木隠に猶日数へて咲るうの花 冬音

【宣阿】

【長隣】〈下句、心ゆかずや〉

【慶安】

雨後蟬

9 村雨の晴行あとは雲もなき空までひゞく蟬の諸声 仙庵

【宣阿】○〈宜候〉

【長隣】○村雨の晴行雲の追風に空までひゞく蟬の諸声

〈物つよく、珍重に候〉

【慶安】

10 夕立の名残の露に鳴せみの声も涼しき衣手の森 冬音

【宣阿】○夕立の名残の露に鳴せみの声も涼しき森の下陰〈珍重〉

【長隣】○〈一体やさしく、甘心に候〉

【慶安】○〈珍重〉

閑庭露

11 夫かとも問れぬ庭は秋草に心のまゝの露のゆふ暮 常観

【宣阿】〈露の夕暮、制の詞にて、よまぬ事に候。制の詞の内、雪の夕暮・雨の夕暮・露の夕暮、よみ不申よし〉

【長隣】○夫かとも問れぬ庭の秋草に心のまゝの露ぞ置ぬる

〈尤甘心に候。但結句、用捨の事に候。仍——〉

【慶安】○夫かとも問れぬ庭は秋草にをきしをまゝの露の夕暮

〈古哥取、面白候〉

12 あだなりと見し世の露も今更にこゝろをみかく浅茅生の宿 副雄

【宣阿】○あだなりと見し世の露も今更にこゝろくだくる浅茅生の宿

【長隣】〈閑の字、眼目に候。いひおほせずや侍らん〉

【慶安】〈聞えがたし〉

水郷月

13 澄月の影を移して水瀬川波の底にも秋のいろ哉 仙庵

【宣阿】〈結句、いかゞ〉

【長隣】〈家隆卿、湖の海や月の光のうつろへば波の花にも秋は見え

けり。心かはらずや〉

【慶安】

14 眺やる水上遠くてる月のひかりに下す宇治の柴ふね 副雄

【宣阿】○〈風景宜候〉

【長隣】○〈よろしく候〉

【慶安】○〈珍重〉

行路紅葉

15 ちしほ迄染し楓を分行ば袖さへ秋のいろに出けり 仙庵

【宣阿】 ○ちしほ迄染し楓を分行ば袖さへ秋のいろに出ぬる

【長隣】 ◎〈珍重に候〉

【慶安】 ○〈宜候〉

16 玉鐙の道行人の袖笠も共にしぐれの染る丹葉々 常観

【宣阿】 〈笠の字出候、詮なく候〉

【長隣】 ○〈尤甘心に候〉

【慶安】

落葉

17 吹誘ふ音を聞にも冬の夜のあらし淋しく木葉降なり 副雄

【宣阿】 ○〈宜候〉

【長隣】 ○時雨する音にまがへて冬の夜のあらしの木葉降も寂しき

〈尤甘心〜〉。但詞つゞき、いかゞ。仍——

【慶安】 ○いねがてに聞ゆる音も冬の夜のあらし寂しく木葉降也

〈出来申候〉

18 今朝見れば積る落葉に浅茅生のめ馴し庭も面替りして 仙庵

【宣阿】

【長隣】 ○朝まだき積る落葉よ浅茅生にめ馴し庭も面替りして

〈是又珍重に候〉

【慶安】 ○今朝見れば積る落葉に浅茅生の目馴し庭も面替り

寒芦

19 いつとなく枯て砌の池寒み芦の臥葉ぞ水閉ぬる 副雄

【宣阿】

【長隣】 ○いつとなく枯て砌の池寒く芦の臥葉も水閉ぬる〔A20参照〕

【慶安】 ○いつしかに池の砌の風寒く枯臥す芦も水閉けり

20 水鳥の床もあらはに三嶋江や霜枯寒き芦の村立 冬音

【宣阿】 ○〈宜候〉

【長隣】 ○〈右二首〔A19とA20〕、とりぐよろしく候や〉

【慶安】 ○〈風情、面白候〉

近恋

21 いかなれば軒端に並ぶしのぶ草余所めに袖の涙せくらん 常観

【宣阿】

【長隣】 ○いかなれば軒端並べて忍草しのびに袖の涙せくらん

〈尤甘心に候。但四句、聞なれたり。仍——〉

【慶安】 〈心さだか不成〉

22 いひかはす芦の中垣へだてゝも思ひは同じ軒の下草 冬音

【宣阿】 ○

【長隣】 〈上下連続せぬやうに聞え候〉

【慶安】 〈下葉は思ひしげるとや。不聞〉

馴恋

23 おもひせく泪の雨の折くになれていろそふ山姫の袖 冬音

【宣阿】 ○

【長隣】 [A 24 参照]

【慶安】 〈上の句、馴恋にあらざ〉

24 しのびあひし昔も同じ思ひには馴し印と何をかはせん 仙庵

【宣阿】

【長隣】 〈右両首〔A 23とA 24〕、ともに心ゆきても聞えずや。山姫

の袖、何ゆへ出たる歟。後の、初句、字あまりの上、心もいかゞ。又し文字三も、かしがまし〉

【慶安】 ○

寄灯恋

25 窓しろく明行閨にともし火のきゆる斗の思ひをぞする 仙庵

【宣阿】 ○

【長隣】 ○下待て明行閨のともし火のきえなでかゝる思をぞする

〈尤甘心に候。但窓・閨、重畳候、いかゞ。仍——〉

【慶安】 ○窓に入風ならなくも灯のきゆるばかりの思をぞする

26 待詫てひとりぬる夜の灯はもへておもひのくらき物かは 常観

【宣阿】

【長隣】 〈下句、心ゆかずや〉

【慶安】 ◎待詫て独ぬるよの灯はけなくもくらき心ならひか

故郷

27 何国ぞとさして分べき方もなしむぐらに閉る古里の庭 常観

【宣阿】 ○〈宣候〉

【長隣】 ○たが住し跡と分べき方もなし葎に閉る古郷の庭〔A 28 参照〕

【慶安】 ○垣ねぞとさして分べき方もなし葎に閉る古里の庭

28 斧の柄の朽もしらず住荒て里はむかしの面影ぞなき 冬音

【宣阿】

【長隣】 ○斧の柄は朽るともなく住荒て里はむかしの面影ぞなき

〈右二首〔A 27とA 28〕、とりくよろしく候〉

【慶安】 ○斧の柄の朽るとなしに住荒て里は昔の面影も見ず

榊

29 神垣や隔はあらじ榊葉の香を一筋に留てさゝまし 副雄

【宣阿】

【長隣】 ○神垣やめぐみ隔てぬ榊葉になを万代や留てさゝまし

〈珍重に候〉

【慶安】

30 千早振神代のまゝに榊葉も采ひさしき天の香久山 冬音

【宣阿】○〈宜候〉

【長隣】○

【慶安】○

奥書

【宣阿】点十六首。此一巻、近来之内、別而御秀逸。珍重く。宣阿

(花押)

【長隣】僻案愚墨二十一首之内、長二首。長隣〔盈細〕茶印)

【慶安】十九点、内長一。慶安〔郷高〕朱印)

B 平井冬音詠二十首和調

(宣阿点〈享保元年七月〉・長隣点〈享保二年七月〉)

平井冬音上

雲間郭公

1 殊更になごりぞしたふ時鳥雲の絶間をもらす初音は

【宣阿】○

【長隣】◎月ならで聞もさやけしほとゝぎす雲の絶間にもらす初音は

〈尤珍重に候。但一、二句、無味に候。仍——。本哥を

以、付墨いたし候〉

江中菖蒲

2 風かほる水のみどりも深き江になびく菖蒲の影ぞ涼しき

【宣阿】○〈よろしく候〉

【長隣】○風かほる水のみどりも深き江になびくあやめの色ぞ涼しき

〈是又珍重に候〉

門田早苗

3 せき入る水の心も外よりぞわきて門田に早苗取也

【宣阿】

【長隣】〈心ゆきてもきこえずや侍らん〉

暁更照射

4 寄鹿の目合す程も短夜やともしのかげの余所に明行

【宣阿】○

【長隣】○よる鹿の目合す程も夏の夜やともしの影の空にしらみて

〈尤甘心く。但二、三句つゞき、いかゞ。仍——〉

旅舟五月雨

5 漕ふねの苦の雫に濡初てうきね侘しき五月雨の空

【宣阿】○とまりぶねの苦の雫に濡初てうきね侘しき五月雨の空

【長隣】〈無味にきこえ候歟〉

寢覚水鶏



6 聞馴てぬるが中にも幾度かね覚しらする水鶏成らん

【宣阿】

【長隣】 ○聞馴てぬる宿にも幾度か夢さまさする水鶏成らん  
 〈珍重〉。但四句、いかゞ。仍———

叢中螢火

7 夏草の茂き思ひのむねの火もこがれていとゞよるほたる哉

【宣阿】

【長隣】 二、三句、重畳に候歟。下句も、珍気なし

毎夜鶉川

8 消もせめやみより闇の夜をこめて篝火たのむ鶉舟悲しも

【宣阿】

○消もせずやみより闇の夜をこめて篝火たのむ鶉舟悲しき

【長隣】 ○此世にも闇よりやみの夜をかけて篝火たのむ鶉舟悲しも  
 〈是又珍重〉。但初句、心ゆかず候。仍———

池上蓮

9 よる波も玉かとばかり池水に心をみかく露の蓮葉

【宣阿】

【長隣】 をく露は玉とあざむく池水にこゝろも清き□の蓮葉

〈尤甘心〉。但一首の心、落着、いかゞ。仍———。是又  
 本哥により候

林頭蟬

10 陰深き岡への松の夕風に梢をわたる蟬の諸声

【宣阿】 ○

【長隣】 ○〈景気よく、珍重に候〉

寄初草恋

11 浅からず根ざしにけりな初草のはつかにもゆる下の思ひも

【宣阿】 ○

【長隣】 ◎浅からぬ根ざしとをしれ初草のはつかにもゆる下のおもひも  
 〈上下とり合よく、甘心に候。但けりな、あたり所なし。仍

———

寄忍草恋

12 此まゝに朽も果なばふる里の軒にしのおの草の名もうし

【宣阿】 ○此まゝに朽も果なばふる里の軒にしのおの草の名ぞうき

【長隣】

寄思草恋

13 うら枯る尾花がもとの思草おもほえずのみ色に出らん

【宣阿】 ○

【長隣】 ○とへかした尾花がもとのおもひ草いろには出ぬ露の乱を  
 〈甘心〉。但下句、心ゆかず候。仍———

寄下草恋

14 わりなしやうき名は余所に守山の時雨も染ぬ松の下草

【宣阿】

【長隣】 ○つれなしやうき名はよそにもる山のしぐれも染ぬ松の下草

〈是又甘心く。但初句、□□□らずや。仍——〉

寄忘草恋

15 つれもなき種や蒔けん住の江の岸根に生ふる〔靡く長隣〕 恋忘草

【宣阿】

【長隣】 ○つれなしやいつ種蒔て住の江の岸根の草の名にも忘れぬ

〈尤珍重く。但心、落着、いかゞ。仍——〉

暁遠情

16 哀しる唐土人のこゝろまでね覚もよほす袖の泪に

【宣阿】 〈ね覚、題にてはよみ候。うたは、四十歳以上にてよみ候〉

【長隣】 〈下句、上にとりよらずや〉

夕幽思

17 物おもひに猶も立まふうき雲の夕をいとふ行末の空

【宣阿】

【長隣】 何となく立まよふ空の浮雲に夕はいとど物をこそおもへ

〈是又珍重に候。但つゞけがら、いかゞ。仍——〉

雲浮野水

18 立ぬるゝすそのゝ水の草がくれ行かふ雲も影をひたして

【宣阿】

【長隣】 ○〈下句、少ふるめかしけれど、及点候〉

旅宿夢

19 草枕結びもはず故郷は夢にも猶や遠ざかるらん

【宣阿】 ○草枕結びもはず故郷は夢にさへ猶遠ざかり行〈珍重〉

【長隣】 〈夢の字歟。夢の字、題書に見えず。題の文字には、異体な

し〉

寄神祝

20 治まれる代々の恵は行末もかけてぞおもふ神の白木綿

【宣阿】 ○〈面白候〉

【長隣】 ○治れる代々のめぐみに行末をかけてぞ思ふ神の白木綿

〈よろしくきこえ候〉

奥書

【宣阿】 〔ナシ〕

【長隣】 僻墨十四首之内、長二首。（「盈細」茶印）